

大塚敬節
矢数道明
責任編集

世漢方医学書集成

111

多紀元堅七

名著出版
刊



南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成

111

多紀元堅(七)

第Ⅳ期
全16卷

昭和五十八年九月二十二日 発行

編者

大塚敬節
矢数道明

発行者

中村安孝

発行所

株式会社
名著出版

東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八一五)一二七〇番代
振替口座 東京七二〇七九四番

製版所

株式会社
日本写真製版社

印刷所

有限会社
伊藤印刷

製本所

辻本製本所



予約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えします。

責任編集

大塚敬節

矢数道明

編集委員

山田光胤

寺師睦宗

大塚恭男

矢数圭堂

松田邦夫

凡 例

一、本書第一一巻「多紀元堅(七)」には、『藥治通義』を収録した。

二、本書は全て影印版によったが、影印にあたつては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮少し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、底本にある蔵書印及び書き込みは省略した。

ホ、印刷不明な箇所は、他の版本等により補正したところもある。

一、底本は次の通りである。

『藥治通義』 版本 (天保十年版) 十二卷五冊(矢数道明所蔵)

一、本書収録書目の解題については、第一一〇巻「多紀元堅(六)」に記した。

多紀元堅
(七)

目次

凡例	七
藥治通義	七

序	五
---	---

目錄	七
----	---

卷第一	一五
-----	----

用藥勿偏執	一五
-------	----

用藥有方土之宜	三
---------	---

老人用藥法	元
-------	---

婦人用藥法	三六
-------	----

卷第二	四九
-----	----

治病求本	四九
------	----

治有標本	五
------	---

治有緩急	三
------	---

治有先後	七
------	---

虛實治要	六
------	---

用藥有四時之弁	一九
---------	----

用藥有貴賤之別	二五
---------	----

小兒用藥法	三
-------	---

傷寒雜病治法之異	四五
----------	----

治宜防微	五
------	---

治有初中末	六
-------	---

治有輕重	六七
------	----

治貴心交	七
------	---

治當保護胃氣	三
--------	---

治不必顧忌…………… 九六

治有不可正行…………… 九六

探試…………… 一二

治有隨所得而攻…………… 九六

反治…………… 一〇三

外患當以意治…………… 一二四

卷第三……………

方法大綱…………… 一二九

攻補寒熱同用…………… 一二七

氣血調治…………… 一三七

補瀉要領…………… 一二三

五藏苦欲補瀉…………… 一三三

卷第四……………

汗吐下總說…………… 一四五

汗下遲早…………… 一五五

發汗不用燥藥…………… 一七〇

虛家不可大汗…………… 一七七

汗下寒熱…………… 一五三

汗法大旨…………… 一六〇

發汗不可太過…………… 一七二

卷第五……………

下法大旨…………… 一八三

下邪熱不宜丸…………… 二〇九

虛秘不可峻利…………… 二二三

用下勿拘結糞…………… 二〇五

溫下…………… 二二一

卷第六……………

吐法…………… 二二九

禁吐諸證…………… 二三九

二三九

卷第七.....二四二

補法大旨.....二四二

平補.....二六二

補氣補血.....二六六

補不宜涼藥.....二七三

卷第八.....二七七

清法.....二七七

消法.....三〇一

殺虫.....三四

卷第九.....三二九

諸劑概略.....三二九

酒醴.....三三三

熨.....三三六

漬浴澡洗.....三四一

卷第十.....三六三

方藥離合.....三六三

用方貴約.....三七三

方味多寡.....三八二

參附功用.....二五八

峻補.....二六四

補要陰陽相濟.....二六九

禁補諸證.....二七四

溫法.....二九三

淡法鎮法.....三〇九

湯散丸.....三三二

膏.....三三三

熏蒸.....三三九

導法.....三四五

方劑古今.....三六六

古方加減.....三七六

單方.....三八四

七方	三六
七情合和	三九五

君臣佐使	三九二
方劑分量	四〇六

卷第十一 四三

藥分三品	四三
草石之異	四三五
藥性生成本原	四五三
一藥兼主	四六〇
引經報使之謬	四七〇
藥品生熟	四七六
藏藥貯擬法	四八三

藥性皆偏	四三三
氣味	四三九
藥性專長	四五八
功用大体	四六三
藥宜精摺	四七二
製藥	四七八

卷第十二 四八七

煮藥總說	四八七
藥有別內湯中	四九六
去滓再煎	五〇一
作丸散酒膏法	五〇三
服藥多少	五〇九
服補瀉汗吐湯法	五四四
嘔家服湯法	五八

煮藥水火	四九一
引藥	四九九
藥滓再煮	五〇三
服藥節度	五〇六
服湯要溫清	五一
服藥不必盡劑	五二七
小兒服湯法	五三一

服丸散酒法·····	五三
服藥禁忌·····	五六

服藥不可與食相連·····	五七
---------------	----

藥治通義

藥治通義

No. _____		溫知堂醫院藏書				
缺完	入手	刊寫	年代	流派	著者	書名
卷	昭和 年 月 日					
冊	冊					

矢數道明藏書

天保己亥鐫

藥治通義

存誠藥室叢書

藥治通義序

醫有大法焉。病之爲變。不可端倪。則當就大法。而求法外之法。已苟鹵莽自逞。不知有古人之矩度。詎能得達圓活之機。治沈艱之患乎。所謂法者。診視有法。辨證有法。鍼灸有法。用藥有法。他及達生之技。理傷之術。各靡不有法。而用藥一法。實爲緊要。但前賢所論。頗失泛冗。且從無纂本。人少尋繹。元堅不敏。深慨于斯。因取家所藏書。鉤索討究。旁互而參審。掇其精切者。彙爲十二卷。名曰藥治通義。言者之後先。固所不拘。然事必徵古。其次第諸說。要義趣相須。詳略相資。其餘義可證。及宜備一說者。並類附各款。倘遇語句有疵。夾注于其下。要質諸實驗。贅述鄙

見如諸迂拘難信。杜撰無據者。概置不錄。廿餘年來。易豪者五。中間補苴。不知凡幾也。蓋用藥施治之宗。兆補瀉汗吐之理。湯散丸膏之致。以至方藥綱領。煮服條例。逐層辨析。瞭然易觀矣。顧熒燭之見。去取何當。然彼大法者。略存其梗概。則欲求法外之法者。庶幾有須于此歟。如夫神詣妙悟。云方略如何者。固存于其人云。

天保丙申正陽之月。東都醫官丹波元堅亦柔一字蒞庭撰